

# 辻元清美の

## 永田町航海記

リターンズ

98

イラストレーション/石坂啓

### 菅

政権が終わった。苦悩と希望がひしめき合う日々だった。

最初は官僚のピラミッド型思考回路とボランティア・NPOのネットワーク・アメンバー型の動きが組み合わさらず苦戦。全省庁の官僚と連日会議をするも、話を遮られることさえあった。でも七〇万人のボランティアや各種団体の奮闘ぶりが浸透、「この力なしに復興はない」という空気に政府内はさまがわり。

浜岡原発の停止要請から「脱原発依存」に突き進む菅さんは一進一退に見えた。不信任案騒ぎ直後、米国の政治学者であるジェラルド・カーティスさんを総理室にお連れした。「原発事故直後どう進展するかわからなかった。東京全域に被害がおよぶ事態を想定した時、避難方法が見つからない。背筋がゾツとした。広大な土地ならいざ知らず、狭い日本で原発との共存は無理」と思い知った」と菅さん。「総理、その通り国民に言おうよ」と私。「直接、国民に素直な意見を伝えることが大事」とカーティスさん。「総理としてどこまで本音で語ったらいいか難しいんだよ」

### 市民運動出身者に総理は無理？ 菅総理とともに官邸を出ます



と唸る菅さん。「ここまで弓矢を打ち込まれたのだから開き直ったら」とたたみかけると「もう弓矢が刺さる所がないよ」と苦笑い。

菅総理と仙谷官房副長官とのビミョーな関係にも気を配った。官邸五階にいる総理以外の八人の政治家（官房長官、二人の官房副長官、五人の補佐官）に焼き討ちにあっても総理を守るという覚悟がなければ政権は崩壊する。でも仙谷さんが菅さん後の大連立模索と報道され隙間風が。

四月に「被災地に行こう」と私は仙谷さんを誘った。厳しい現実に向面すれば永田町政局など吹っ飛ばはず。気仙沼の避難所を訪ねた時「こ不自由を

かけます」と仙谷さんが泣いた。私は暫くして菅さんにそれを伝えた。今度は菅さんの目に涙が溜まった。菅さんの涙をまた仙谷さんに伝えた。力を合わせようと何度も二人に呼びかけた。「年越し派遣村」以来の政策も形になった。湯浅誠さんらと官邸直属で進めた「社会的包摂政策」も緊急提言をまとめた。「気になることをやってしまおうよ」、朝鮮学校無償化手続きを再開。総辞職前日、ぎりぎりセーフ。

さて「市民運動出身者に総理は務まらない」という声があるが？ 自らの考えや政策を実現しようとすれば、意見の違う人との利害調整は避けて通れないのが政治。うまく進まないことの方が多い。「幕が上がった時はすでに調整が終わった時。菅さんは幕が上がってから駒を進めるから唐突と言われる」と古賀誠自民党元幹事長。

菅総理の辞任会見に立ち会った時、大臣と総理は違うとしみじみ。大臣は政策遂行でよいが、総理の仕事は「統治」。ミツラン元仏大統領は社会民主主義について「崇高な理念をめざす哲学の政治であると同時に、現実と切り結ぶリアルポリテックスの覇者でなければならぬ」と。この言葉をかみ締めて、私は菅総理とともに官邸を出る。

(つじもと きよみ・衆議院議員)